□ 合　唱

保　延　裕　史

2021年のクラシック音楽界は，前年から続く新型コロナウィルス感染症蔓延の影響を受けた状況で始まった。2020年後半，演奏会の開催が感染予防策を十分に講じた上で観客の人数制限等を設けながらも徐々になされ，年末には生誕250年を迎えたベートーヴェン「第９交響曲」の公演も行われた。明けた2021年，感染者増加による医療資源逼迫による緊急事態宣言発出下においても，入国時の待機がネックとなった外国人音楽家の来日は少数に留まったものの，主として日本人音楽家による演奏会の開催は容認され，後に会場の人数制限も撤廃された。

しかし，他のジャンルに比べて大勢の人間が密の状態で集まり，当然ながら飛沫を伴って発声を行う合唱については，日常的な練習やリハーサルを含めて活動再開に慎重な対応が求められ続けた。元来，わが国の合唱は他の器楽とは違って，職業合唱団の活動に加え，全国的に組織された合唱連盟傘下のアマチュア合唱団など合唱愛好家が演奏活動の多くの部分を占めてきたが，近年ではプロ・アマ相互の連携と補完が顕著になった経緯があった。ところがこの２年，自由に歌うことが束縛され，職業合唱団が経済的な苦境に立つと同時に，全合唱人にとっては人間としての生きる糧が失われかねない危機に直面することになった。そこでこの共通の認識の下，打開策の模索が始められた。まず昨年は東京混声合唱団による「歌えるマスク」の開発に始まり，東京都合唱連盟，全日本合唱連盟の科学的実証実験が重ねられ，どうすれば歌唱による感染を防げるかの成果をかなり詳細に得ることができた。徹底した感染対策，メンバー同士の間隔確保，換気とマスクの着用など，実証実験の成果を踏まえ策定されたガイドラインに沿って合唱活動が行われ，広がりを見せた。この間，職業合唱団がメディアを通じ情報発信を積極的に行ったことが功を奏した面もあり，結果として2021年はプロの合唱演奏会は増加，アマチュアではNHK全国学校音楽コンクール，全日本合唱連盟による全日本合唱コンクールが２年ぶりに開催された。ただ一部で感染状況の変化が演奏会の中止や延期，指揮者，ソリストの変更，またコンクールでは地方大会で審査が録音，録画への変更を余儀なくされ，主催者を混乱させたこともあった。さらに年末には新変異株の出現による入国規制が厳格化されたことで「第９」公演が影響を受けた。一方で合唱団はかつてのようなアマチュア参加型は全面的に復活することなく，プロが主体となった。

これまでコロナ禍下での合唱が置かれたマイナス面，あるいはネガティヴな要素を例示してきたが，そればかりではなく未来に向かって肯定的な事象も視界に入ってきたことも報告したい。まず，演奏の動画を配信する試みが始まって広範囲に浸透したこと。また，複数人が同時に参加できる「リモート合唱」が行われるようになり，パート練習はリモート，全体練習は対面というように多様な運用の可能性が生まれた。こうしたオンラインを活用した合唱形態は窮余の一策で開始されたとは言え，比較的容易であり，合唱を含めた音楽界全般への今後の可能性を示唆したものと考えて良さそうである。

さてここからは2021年に開催された演奏会を具体的に見ておく。まずアニヴァーサリー作曲家としてストラヴィンスキーが挙げられるが，合唱作品の特筆すべき演奏は見られず，また海外からの合唱団の来日は渡航制限のために行われなかった。国内オーケストラとの共演は極めて少数だった。その中で９月，東京交響楽団演奏会でヴォーン・ウィリアムズ「海の交響曲」が原田慶太楼指揮（東響コーラス・冨平恭平合唱指揮）により取り上げられたことは注目される。合唱団は舞台後方席に間隔を開けて配置，マスク着用での歌唱となった。

一方，職業合唱団の演奏会は年間を通して行われた。東京混声合唱団では演奏活動の中核となる定期演奏会は第254回（１月）が指揮・キハラ良尚，ピアノ・織田祥代，ゲスト指揮・栗山文昭，ピアノ・寺嶋陸也，監修・信長貴富，曲目は寺山修司の詩による６つのうた「思い出すために」「そうそうと花は燃えよ」「静寂のスペクトラム」（以上信長貴富），「木とともに人とともに」から「空」「生きる」（三善晃）で，第255回（３月）が指揮・藤岡幸夫，ピアノ・浅井道子，ハープ・早川りさこ他，曲目「三つの抒情」（三善晃），新作委嘱初演作品「Melodies in Mozart（上田真樹），「レクイエム・室内楽版」（ラター）で，第256回（12月）が指揮・山田和樹，ピアノ・栗田妙子，曲目「黒人霊歌集（編曲・三善晃），新作委嘱作品（栗田妙子），「虹の輪」（鈴木行一），混声合唱のオートノミー（水野修孝）で行われ，特別定期演奏会の林光メモリアル「東混・八月のまつり」は指揮・沼尻竜典，ピアノ・寺嶋陸也，曲目「原爆小景」「日本抒情歌曲集」から他（林光），「六つの子守歌」（池辺晋一郎）で行われた。また特別演奏会～田中信昭と共に～東混オールスターズ（８月）では指揮に田中信昭，山田和樹，キハラ良尚，松原千振，大谷研二，水戸博之，山田茂，高谷光信とピアノが中嶋香と萩原麻未により行われ，東京以外での演奏では「合唱でオペラ」（２月，横浜），10月には住友生命いずみホール定期演奏会No.26が指揮・高谷光信，ピアノ・酒井有彩で委嘱作品・混声合唱とピアノのための「ソナタ第３番」（首藤健太郎）の初演が行われた。さらにNコン，全日本コン２つの合唱コンクール課題曲を中心とした曲目によるコン・コン・コンサート2021が岩手県一関と東京で行われ，「合唱の輪」と題した松下耕，相澤直人，三宅悠太，上田真樹の作品による新しいシリーズが始まり，合唱のリーダーとしてアマチュアとの連携を重視する姿勢を打ち出したのに加え，デジタル通信を利用した幅広い層へのアピールも積極的だった。バッハ・コレギウム・ジャパンの定期演奏会は，第142回はバッハ「マタイ受難曲」（鈴木優人指揮），第143回は「バッハ結婚300周年記念～ケーテンの愛」プログラム（鈴木雅明指揮），第144回はベートーヴェン「オリーブ山のキリスト」（鈴木雅明指揮），第145回は教会カンタータ・シリーズVol.79「待降節のカンタータ」（鈴木優人指揮）が行われたほか，クリスマスにはヘンデル「メサイア」等の特別公演があった。関西ではびわ湖ホール声楽アンサンブル（監修・沼尻竜典）は11月に第73回定期公演および東京公演を「日本合唱音楽の古典Ⅵ」として，神戸市混声合唱団（音楽監督・佐藤正浩）は９月に「物語の始まり」と題した「秋の定期」を開催するなど存在感を示した。